う．その頃，電離層委員会かどこかで直接お目にかかっていたかもしれないが思い出せない．またその時，大きな観測をはじめられる事を羨しいと思ったような気がするがはっきり思い出さない．ずっと後，田中さんが何かに日本の電波天文の歴史を書かれるという事でちょっと昔のお話をした事がある．田中さんは5行5列の話を覚えて居られて，私達の考えにはどこか甘いところがあって，あのままでは駄目だったと思うよといわれた．

電波天文は私にとっていわば初恋の相手である．ずっと折にふれ色々な方々に話を聞いたり，野辺山の太陽電波の干渉計を何度も訪れたりしたが，シンパとして所属していた宇電懇だったかで電波の将来計画が議論されるようになって田中さんとは時々会うようになった．野辺山の新しい計画も自分の事のように昂奮して及ばずながら声援を送ったものである．その頃だったか，私がX線天文の方で考えたすだれコリメータを，あれは心情的には昔の干渉計の続きなんだろうと聞かれたことがある．

田中さんが名古屋から東京に移られて間もなく，私は野辺山の建設現場を家内と日帰りで見物(?)に出かけようとした．丁度用事があるので車に乗せて行けと言われて一緒に行って工事中の泥んこの中を歩き回ってすみからすみまで見せて戴いた．その時に，良い年をして名古屋からわざわざやってきて，しかも完成の時には定年なんて，あんたも馬鹿だけどこういうのを何とか冥利につきるとでもいうのか，羨しいねと軽口をたたいた事だった．野辺山の開所式の時，田中さんの晴姿をどんな気持なのかなと思って見ていたものである．

東洋大に移られてから，また本格的な一仕事をされた事を知って，つい先頃野辺山の共同利用委員会の時に，さすがだねと言ったら，ちょっと得意そうな顔をされたのが目に残っている．片想いだったかもしれないが，友を失ってしまったというどこかに穴があいてしまったような気持になっている．（小田　稔）

なにをグズグズ・・・

田中先生はいつも正義と実行の人だった．そしてその正義をいつも先頭に立って，テキパキと，竹を割ったような正確さで進めていかれた．私たちがクヨクヨしていると，かならず，くちぐせの「なにをグズグズやってんだヨ」が飛び出す．だからと言って融通のきかない正義漢ではない．相手の話はよくきき，理あるいは非を認めると，「なるほど」と意見を変えるのもまた竹を割ったように潔いのである．すごく真面目なくせに駄じゃれが好き，失敗談も多いおもしろい先生だった．

まず正義と実行．これはもう皆さんの目にも，そしてこの追悼号の他の先生の文にも満載と思うので簡単にすませそう．

先生は空電研究所在任当時から宇宙電波の計画の中心になって進めておられた．そして 1976 年東京天文台に移ってこられた．宇宙電波の計画はその頃は各方面の意見の調整に手間取っていた時期だった．いわばアアでもないコウでもない式にいつまでも続くやりとりは，先生にとって「なにをグズグズ・・・」であったと思うが，そのようななかでも先生の力で計画は進んでいった．全体の計画の陣頭に立つだけでなく，測量，土木建築，位相安定ケーブルの開発研究と製作なども直接担当して強度計算，温度係数の測定，ときには費用の概算見積まで，テキパキとこなされた．「地下に埋まっているものは全部ワシがやったものだ．」なんて酒の席で言っておられたことがあるが，どうして地上にも先生の作品はこと欠かない．

土木建築といえば，先生はいつも天文学でのその重要性を力説しておられた．望遠鏡は天文学にとっては単なる手段，という考えからすれば土木建築はそのまた道具に過ぎないということになるだろう．こんな考えがまだ根強く残っている日本の天文学のなかで，そしてこれから発展して行かなければならない日本の天文学において先生のこの考えは貴重なものだと思う．

目の前の正義をテキパキ実行して行くという先生の生きかたは，日常のこまかいところにも余すところなくおこなわれていた．階段を二段ずつ上がる，10 秒でも遅刻すると叱られる，制限スピードを 10 キロ近くはオーバーしないと気に入らない（そこまでは絶対に捕まらないと先生は信じておられたようだ）などあげていけばきりがない．人はそれをせっかちとか短気とか呼び，先生もそう自称しておられた．

先生のピンポンも短気決戦？型だった．うまく打ち込まれたり，失敗したりした時の声は凄かった．私も声では負けないほうであるが，ピンポンでだけは先生の声に負けていた．とても高い球でユックリ返球してくる選手と試合して返ってくる球が待ちきれず困ってしまわれた先生の試合振りは今でも思い出す．

東洋大学に移られて，それまでいつも大きなグループを率いられてきた諸々の責任から解放された（と言っても学術会議会員をはじめ多くの役職はついて廻ったが）先生は張り切ってとても楽しそうに研究しておられた．ホログラフィーの実験などで野辺山に来られた時も学生さんをひきつれて相変わらず足早に歩きまわっておられた．

そんな先生の姿をもう再び見ることはない．本当に，先生らしく，サッと行ってしまわれた．

田中先生，そちらの世はもういくら急いでも仕方のない世です．少しはノンビリする楽しみも開発してください．（森本　雅樹）